



Title	近代日本における西洋音楽の普及：社会学的考察
Author(s)	加藤, 善子
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/41982">https://hdl.handle.net/11094/41982</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">&lt;a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"&gt;</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">&lt;/a&gt;</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	加藤善子
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第15119号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科教育学専攻
学位論文名	「近代日本における西洋音楽の普及—社会学的考察—」
論文審査委員	(主査) 教授 菊池 城司  (副査) 教授 近藤 博之 教授 池田 寛

### 論文内容の要旨

本論文は、近代日本におけるクラシック音楽の「聴衆」の成立過程から、日本においてクラシック音楽にどのような意味付けがなされたか、その意味はどのように社会集団によってつくられたのか、という問いを明らかにするものである。この作業により、近代日本社会が持っていた構造、性質のある一面を浮き彫りにすることができる。ひいては、広い意味で音楽社会学の分野に新しい局面を開き、音楽趣味の変遷から日本近代の社会を捉え直す手がかりを提供することを目指す。音楽社会学、趣味の社会学、音楽に関する社会史研究を参照し、日本における西洋音楽の「聴衆」の誕生、そして彼らの愛好スタイルを明らかにすることを試みた。

本論文が対象とするのは、明治後期から第二次世界大戦までの時期である。この時期は、日本音楽史における研究が比較的少ない時期であり、そして、不特定多数の「聴衆」が誕生したのがこの時期であると考えられるためである。

第一章では、日本近代において西洋音楽に関わった人たちがどのような経歴を持っていたのかを概観した。音楽に関わった人々は、教師、演奏家、評論家に大別されるが、彼らの経歴がそれぞれで傾向が異なっている。これまでの日本の西洋音楽受容史において非常に重要な役割を果たしたとされる東京音楽学校は、演奏家や作曲家ではなく、もっぱら教師を育成していた。演奏で生活を立てる職業音楽家＝演奏家は、軍楽隊、百貨店や新聞社で明治後期に併設される少年音楽隊において育成されており、評論家は、音楽学校以外の高等教育機関を経由し、まったく別の職業を持っているディレクターたちの余技であったことを示した。

第二章では、最初の西洋音楽愛好者たちの個々のケースを取り上げた。彼らの一部は評論家として昭和期、戦後に活躍することになったのであるが、彼らはどのように西洋音楽に触れ、愛好者となったのか、またなぜレコードも無い時期に音楽愛好を維持することができたのかを具体的な事柄やエピソードにまでおとして検討した。西洋への物理的・心的距離の近さ、音楽愛好を通じた人的ネットワーク、出身家庭の文化的経済的環境の3つがそろって初めて、音楽愛好は維持されるものであったことを明らかにする。そして彼らがなぜ評論家になったか、つまり、なぜ評論家にしかなれなかったのか、という問題は、彼らが属していた社会集団の性質、進学行動をとおして考察した。

第三章では、レコードが大衆化する前後、昭和初期に誕生した音楽専門雑誌を中心に展開された音楽をめぐるいくつかの言説をまとめている。昭和初期に初めて西洋音楽は市場を獲得したのだが、その後、レコードによる音楽聴取が大衆化したために、レコード以前の愛好者たちの愛好スタイルが脅かされることになった。同時に、「高級音楽」「低級音楽」という区別—現代用いられる意味での「クラシック音楽」「ポピュラー音楽」というジャンル—が成立し、

それに並行して演奏会で音楽を聴くスタイルとレコードを中心に音楽を聴くスタイルが成立したのである。

第四章では、レコード以降の愛好者の愛好スタイルを考察した。ここで対象としているのは主に学生である。昭和初期に多く行われた学生生活調査において、「音楽」を趣味として挙げる学生が「読書」「映画」と並んで3割前後存在している。戦前においては、音楽教育は、小学校、高等女学校、中学校などの初等・中等学校のみで行われてきただけであつたにもかかわらず、高等教育機関の学生が多く趣味とするに至つたのである。もちろん、学生が音楽を愛好する手段はレコードであつたと考えられるが、その愛好スタイルは多様化していく。中心には、あらえびすに影響を受けた「より真面目な」愛好者がいる。しかし、さらに度を越えた愛好者—例えば丸山真男—が誕生することになった。そして、その周辺には、「軽やかな」聴衆もいたのである。さらに、彼らの様々な愛好スタイルを、学生生活調査や、個別のケースを手がかりに、その出身階層なども考慮しながら分析を試みた。

以上から導出される結論と考察は以下の通りである。

日本の西洋音楽史において、重要な位置を占めている東京音楽学校は、演奏家や作曲家、評論家を養成する場所ではなく、もっぱら教員を養成するところであつた。特に職業音楽家である演奏家は、東京音楽学校に入れなかった者や、軍楽隊、デパートなどの少年音楽隊などでたたきあげの教育を受けた者によって構成された。また、評論は、愛好者が片手間に行うものであつた。そしてこの3つの集団は、互いに没交渉であり、社会の中で互いに関係を持たず、ばらばらで存在していたのである。

最初の愛好者は、評論家集団を内包していた。彼らは、経済的に豊かな家庭に生まれたアッパーミドルの二代目から生まれた。彼らは西洋に関係する仕事を持つ二代目洋風インテリたちを中心として、「旧中間層」の上層部からも同時に生まれた。西洋的な趣味は、「新中間層」が独占したわけではなく、経済的に上層部にいた者から、新しく台頭した俸給生活者層に浸透したのである。このような背景を持つ愛好者は、音楽学校の進学を許されず、普通の進学ルートを取りながら、評論家として活動することしかできなかったのである。評論家を含むこの最初の愛好者集団は、レコード以前に成立したために、音楽に関する情報を得るため、彼らの集団外にネットワークを張り巡らせた。彼らが演奏家や学者たちと交流することで、音楽に関係する人々の間に関係を築きつつあつた。

しかし、レコードの急激な普及により、音楽愛好スタイルは、変化することになった。様々な音楽愛好スタイルがレコードによつてもたらされることになった。レコード以前、愛好者はばらばらで存在していたが、海外で音楽を聴くことのできなかった国内の愛好者は、大正期頃から洋行帰りのものや職業音楽家たち、美学や文学を学ぶ学生たちと積極的にネットワークをつくり、共に音楽を演奏したり文献を集めたりして愛好を維持していた。しかし、レコードが普及してからは、不特定多数の聴衆が成立したが、反対に、ネットワークをつくる必要がなくなり、愛好は個人化していく。その過程で、3種類の愛好スタイルが生まれた。西洋で生まれた「真面目な」愛好者よりも真面目な愛好者、音楽を理論的に分析する愛好者、流れてくる音楽を日常生活の中で楽しむ「軽やかな」愛好者である。その中でも、学生を中心とする「より真面目な」愛好者の音楽への態度が、作曲家を神格化し西洋音楽を「芸術」として見なす方向に向かい、「芸術」としてのクラシック音楽は、昭和10年頃誕生したのである。

現在では西洋音楽を愛好することは「高尚な」趣味を持っていること、またクラシックの演奏家になることは「芸術家」になるという認識があるが、戦前期では「クラシック音楽」は様々な意味を持っていたことである。それは、西洋音楽を受け入れたのが、ある特定の社会集団にかぎられていなかったことにある。西洋音楽を職業としない愛好者に限っていえば、明治期・大正期には「アッパーミドル」集団にかぎられていたかもしれない。しかし、それがその集団内のみで定着する以前に、レコードによつて、愛好者層は学生を中心としてではあるが、様々な社会的背景を持った層に広がっていった。その愛好スタイルも様々なものとなった。西洋音楽をめぐる多様な態度・愛好スタイルが存在する中、最終的に今日のように「芸術」としての側面を西洋音楽が獲得するに至るが、それは様々な愛好者が誕生してから後に付与されたもので、最初からこのような意味づけは存在しなかった。また同時に、「芸術」としての音楽の扱い方は、比較的低い社会階層出身のオーケストラの団員にも、一部の学生にも支持されていた。出身階層や属する社会集団が異なるにもかかわらず、一つの価値基準がまたがって支持されていたことも、指摘しておくべきであろう。

不特定多数の聴衆が成立したことにより、それ以前には存在しなかった、クラシック音楽をめぐる生産者—媒介者—消費者という関係が成立したのではないかと考えられる。レコード以前は、愛好者は評論家集団を内包していた。彼

らが作った関係は、職業音楽家たちを結び付けるだけのものであり、愛好者は媒介者であり消費者でもあったのである。しかし、不特定多数の聴衆は、純粹に消費者集団として成立したため、この関係が成立し、西洋音楽の媒介者たちの意味付けを可能にした。「芸術」としての西洋音楽がレコード普及後の「より真面目な」不特定多数の愛好者に支持されたことによって、社会的に地位の低かった演奏家が芸術家に祭り上げられたと考えられる。

西洋ではすでに音楽が芸術として確立されていたにもかかわらず、日本では昭和初期まで待たねばならなかったのは、「西洋的なもの」すべてが肯定的な評価を得るのが昭和初期であったためである。昭和モダニズムの到来、学生の教養主義、音楽ジャーナリズムの成立、そしてレコードによる不特定多数の「より真面目な」聴衆の誕生、これらが同時に到来したことで、それ以前の演奏家・評論家・教育家の社会的地位の位置が変化した。これが、現在に続いている日本におけるクラシック音楽のイメージの原型を形作ることになったと考えられる。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、近代日本におけるクラシック音楽の「聴衆」の成立過程を追跡することによって、西洋音楽がどのような社会集団によって担われたのか、どのようにして「芸術」としての価値を付与されたのかを解明し、同時にこの過程を通じて、近代日本の社会構造の特徴を浮き彫りにしようと試みる意欲的な研究である。

このテーマに関連する先行研究としては、音楽社会学、趣味の社会学、「聴衆」の誕生の社会史、近代日本における音楽教育史・西洋音楽受容史などの分野がある。それらの研究に断片的なかたちで散在しているさまざまな知見とヒントは、必ずしも明確な像を結ばない。本論文はそれらの先行研究に依拠しながら、どのような社会集団が「職業」として西洋音楽に携わったのか、また、どのような社会集団が「趣味」として西洋音楽が愛好したのか、彼らの愛好スタイルの特徴はどのようなものであったのかなどに焦点をあてることによって、近代日本における「聴衆」の誕生を描き出すことにある程度成功している。

利用された資料は多岐にわたり、『音楽家人名辞典』の統計的分析、『東京音楽学校一覧』、『音楽年鑑』や各種の音楽雑誌などに加えて、各種の学生生活調査類、さらに代表的な「聴衆」たちの伝記的資料に至るまで広く渉猟している。それらをちりばめた記述には細部が詰められてはいないところも残るとはいえ、このテーマに関する、おそらく最初の本格的な論文をまとめたことは高く評価できる。

本論文の価値は、素材であるクラシック音楽の「聴衆」の成立過程を明らかにするだけにとどまらないところにある。初期の愛好者の社会的基盤である華族、大企業・大商店経営者、高級官僚・上級職員などの子弟、とりわけいわゆる「洋風二代目インテリ」に注目することによって、これまで研究が比較的乏しいわが国の上層中流階級への接近が可能となり、解明への手がかりが得られるからである。この方向については、本論文において十分に展開されているわけではないが、クラシック音楽の「聴衆」を手がかりにして、新たな研究対象を開拓する試みとして評価できる。

以上の理由により、本審査委員会は本論文を博士（人間科学）の学位授与に十分に値するものであると判定する。